

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

中西美絵

【所属】(助成決定時)

大阪大学大学院人間科学研究科 博士後期課程

【研究題目】

南スーダン難民の紛争による困難と対処法に関する研究-メンタルヘルスからの検討-

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、紛争の影響を受けウガンダに避難した南スーダン難民のメンタルヘルスに焦点を当て、難民となる過程で受けたトラウマとなりえるような体験と、難民として生活する中で抱える困難に、難民らがどう向き合い、その状況に対処しているのかを検討することである。「メンタルヘルスと心理社会的支援」は、難民や国内避難民を対象とした人道支援において、保護、食糧、水、住居、医療、教育、生計支援等と並ぶセクターの一つとして確立されている。難民は、過去の悲惨な体験から精神的なダメージを受けていると考えられ、ダメージを手当てすることが、難民が安定した生活を取り戻すための基盤になると考えられてきた。このように難民は心のケアの対象となってきたのだが、近年、難民を困難な状況に自ら立ち向かい新しい環境に適応する力を持つ積極的な生存者であるとの見方も出現し、難民自身の持つレジリエンス(回復力)にも目が向けられるようになった。本研究では、難民のレジリエンスを高める要素として、社会支援のありようを一つの着目点として検討する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、難民が困難に対処するためのレジリエンスを高める要素として、社会支援のありように注目している。これまでの自身の調査における難民の語りから、親族間の相互扶助およびキリスト教への信仰が困難への対処に特に重要な役割を果たしている可能性が浮かび上がった。そこで、本研究では、調査の対象者数を増やして追加調査を実施した。

具体的には、ウガンダにある複数の難民定住地の一箇所にて、南スーダン難民を対象に聞き取り調査を実施するとともに、補足的に関係場面における観察および参与観察を行った。聞き取り調査では、半構造化インタビューを実施し、調査対象者の過去の体験について知るために幼少期から現在に至るまでの人生体験について語ってもらい、紛争が与えた影響、その状況への対処法についてたずねた。また、難民定住地内の親族関係、親族から得ている物質的・感情的支援、宗教活動への従事状況についての情報を収集した。聞き取り調査の対象には、困難を抱えている人を特定するために、NGOが行ったスクリーニングで心的外傷後ストレス障害(PTSD)・抑うつ・不安症の症状を持つとされた者、アルコール依存の問題を持つとされた者を含む、支援団体から心理社会的支援を受けている成人男女を選定した他、支援は受けていないがアルコール使用が見受けられる者の中から選定した。また、宗教活動に積極的に従事する人々も聞き取り調査の対象とした。その他、難民が組織する難民福祉委員会のリーダー男女から、同委員会が実施している支援活動についての情報収集を行うなど、多角的なデータ収集を試みた。観察・参与観察は、定住地内の複数の教派の礼拝、会議、教会への奉仕活動を含む宗教活動、市場、その他の日常生活場面で実施した。

【結論・考察】(400字程度)

調査対象の難民定住地において、人々が、親族の誰からどのような支援を得ているのかについて事例を集めた。その結果、物的支援については、他の親族もみな難民という同じ境遇にあることから、得られる支援は主に食糧と医療の分野に限られ、食糧は親族のみならず、隣人からも幅広く支援を得ており、医療支援は

同じクランに属する親族から得ているケースが見られた。感情的支援については、病気の際に定住地内、近隣の定住地間で、親族を訪問し合う等の支援が行われているケースが見られた。

調査地の人々はキリスト教を信仰しており、礼拝、労働奉仕、聖書の勉強会への参加などの宗教活動への従事は日常生活の一部となっている。人々は、困難に遭遇した際には神に祈るという対処法を取っている。中でも悪夢は、彼らの間では、対処がなされなければ悪夢が現実になると考えられており、人々は、教会に行って自分でお祈りするか、もしくは牧師にお祈りしてもらうことで対処している。その他、宗教指導者らは、定期的に定住地内で病を患っている人や、家庭内に問題を抱えた人を訪問し、お祈りや助言を行うという活動も実施しており、人々の困難への対処法の一つとして機能している。また、教会では病人の治療のための寄付も集められている。このように、本研究によって、難民定住地内の難民間の社会支援ネットワークの存在が確認できた。